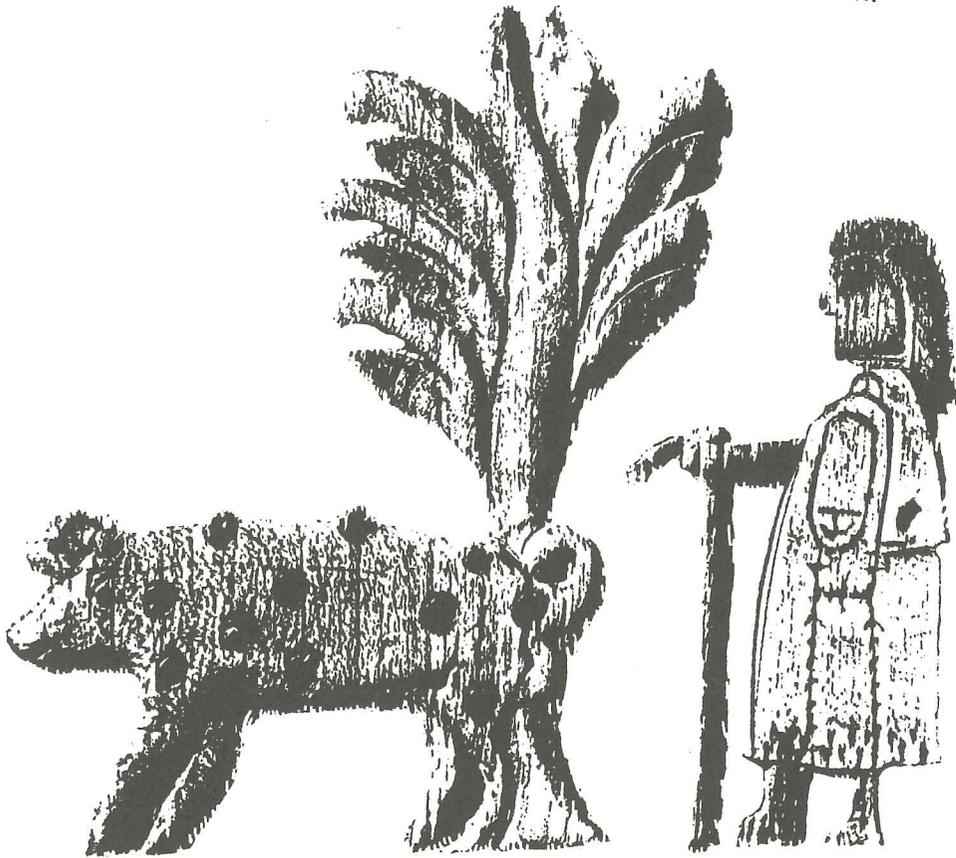


# いのちの豊かさ

本橋成一

*motobashi seichi*



モスクワ市内に九つある終着駅のひとつ、その名もベラルーシ駅を何の予告もなしに発車したゴメリ行きの列車は、ノロノロと走り出す。時速五〇キロほどで、それ以上に速く走る気配はない。通勤帰りだろうか、通過する小さな駅のホームで列車を待つ人たちと行き交っているようだ。

ぼくはまるで映画のファーストシンのような車窓をながめながら、チエルメチボ空港の免税店で買い求めた、ちよつと上等なウォッカをチビリチビリ飲みだす。少し酔って、コンパートメントの寝台に横になると、レールを走るゴットン、ゴットンという車輪の音が、妙に心臓の鼓動に合っているようで気持ちがいい。これからこの列車の終着駅、ベラルーシユのゴメリ駅まで約六〇〇キロ、十三時間の旅が始まる。

チエルノブイリをテーマにしたぼくの写真集や、映画の舞台になっているベラルーシ共和国のチエチェルスク地方に通いだして、もう十五年になる。日本から直線距離にして約八〇〇キロ。飛行機から飛行機に乗り継ぐには一泊しなくてはならないから、同じ二日間の旅になる。それだったら、この列車の旅のほうがいいに決まっている。

ぼくが初めてチエルノブイリの地を訪れたのは、あの原子力発電所の爆発事故から五年

後のことだった。日本の高度経済成長の真っ只中に育つたぼくは、モノが増えることが豊かになることだと思っていた。一九六四年の東京オリンピックを目指してビルが建ち並び、新幹線や高速道路が走り、家庭では洗濯機、テレビ、冷蔵庫、そしてトースターやミキサーまで増え続けることが、豊かさのパロメーターになった。広島、長崎と、何十万人も殺した原子爆弾が、今度は平和利用として、豊かさを支える原子力発電所として登場する。

しかしぼくは、学校を卒業し、写真の仕事をするようになって、カメラを通してたくさんのものに出会っていくうちに、ひとつのモノの豊かさを得るために、本来の豊かなものを一つひとつ失っているに気がついた。便利なものを得ようとすればするほど、公害を生み出し、環境を壊し、人の体やところを壊し、いのちまでおろそかにする。いつの間にか、「ほんとうの豊かさとは何だろう」がぼくの写真のテーマになっていった。

『サーカスの時間』では、手間暇を惜しまない大衆芸能の世界を、『上野駅の幕間』では、非合理的な駅舎だからこそ居心地のよい広場としての駅を、『老人と海』では、小さなサバニで何日もカジキを追い求める与那国の、決して自然に逆らおうとはしない八十二歳の漁師を……。物質文化の氾濫によって消えようとするものの中に、本来の豊かさが見えてくる。

だからぼくは、あのチェルノブイリ事故が起こったとき、ぼくたちが追い求めてきたモノの豊かさが何だったのか、ひとつの答えが見つけられるのではないかと思い、ともかく、チェルノブイリに行こうと思った。

しかしぼくは、なかなか足が向かなかった。あまりにも「核」というテーマが大きすぎて切り口が見つからない。その事故の悲しさを写し並べれば、ひとつの切り口になるかもしれない。しかし、ぼくの言いたいことはそんな写真を並べて言えることではないのだ。だから、いくつかの出版社からの取材の依頼も、いつも曖昧な返事で逃げていた。

そんな腰の重いぼくをチェルノブイリに向かわせたのは、ボランティアでニュースレターやパンフレットに使う写真を撮ってほしいという、立ち上がったばかりの医療支援グループの誘いだ。それは、本当は行きたいのに行かないぼく自身が、足を運ぶいい理由になった。

一九九一年五月、チェチェルスクの地区病院での検診に行く医大の医師たちに同行して、ぼくは初めてチェルノブイリに向かった。事故からもう五年もたっていた。

最初に案内されたのが、あの事故を起こした四号炉だった。五キロゾーン内にある原発事務所で、なぜか白衣に着替え、バスに乗せられ、見学用にコンクリートで舗装された運

動場のような広場に降ろされた。四号炉まで一五〇メートル。それは、何度もテレビや新聞で見た、まさに石棺ということばがピッタリの怪物だった。五分間の約束。

「日に何回も水で洗い流しているから、こは安全だ」と言うのに、ぼくがカメラバッグを置こうとすると、「置くな」と注意される。同行の医師の一人が持ち込んだガイガーカウンターのスィッチを入れると、突然、ピイピイと激しい音が鳴りだした。「いくつだ、いくつだ」とみんな計器の針を覗き込む。平常の二〇〇倍の値。それがどんな数字なのかわからないまま、みんな一斉に興味もなく、バスに逃げ込んだ。熱くも、冷たくも、痛くも痒くもないから、始末が悪い。みんな、何がとても怖かったのだ。ぼくは、「やはり来るべきではなかったのではないか」と、ふと思った。

ふたたびその思いを強くしたのは、ミンスクとゴメリの小児科病棟を訪問したときだった。白血病や甲状腺がんを抗ガン剤で治療中なのか、頭髮が抜けてしまった子どもが多かった。そのために用意してきたものだろうか、年頃の女の子は思い思いの美しいスカーフでおしゃれをしている。みんなベッドでだるそうにしていたが、病室に入ってきたぼくに気づくと、一斉に微笑んでくれた。ぼくの訪問を先生から伝えられていたのだろう。

でも何か不自然だ。ぼくは、とてもすぐに  
はシャッターを押す気にはなれない。「ゴメン  
なさい」と言うべきだろうか。ずるいけど、  
この時ぼくはこの子たちとまともに会話がで  
きなくてよかったと思つた。大人たちが、自  
分たちが豊かになることだけを考えた結果、  
この子たちにみんなそのツケをまわしたのだ。  
会つたばかりなのに、加害者が被害者の写  
真を撮っているようでとても辛い。

最後の訪問地は、医大の医師たちが検診を  
行うベラルーシのチエルチエスク地区病院  
だった。ここは、四号炉から一八〇キロも離  
れているのに、事故当時、地上に舞い上がつ  
た放射性物質の六割から七割が風に運ばれ、  
雨でこの大地にまき散らされたという大汚染  
地域だ。一四九村あるというこの地区の多く  
の村が、強制移住地区や移住勧告地区に指定  
され、人口が四割も減少したという。医師た  
ちの検診の様子を撮影すれば、もう撮るべき  
写真はないのではないかと、この時ぼくは早  
く帰ることばかり考えていた。

地区病院での検診は、四日間の予定で始ま  
った。各地からバスで子どもたちが集まっ  
てくる。医師たちは簡単な会話を交わしながら  
次々に子どもたちを診察する。不安そうな顔  
が、たちまち笑顔に変わっていく。ぼくは医  
療という仕事がちよつとうらやましかつた。  
翌日から、ぼくは病院を抜け出して村々を歩

いてみることにした。

馬車やトラクター、トラックをヒッチハイ  
クして、目的地も決めないまま歩き出した。  
歩き出して初めて気がついたのだが、村々は  
リンゴの白い花をはじめ、春真つ盛りだった。  
ちよつと、ジャガイモの植付け時期で、馬で  
鋤かせた畝に種イモを置いていく。どこの畑  
も家族総出のようでにぎやかだ。この大地が  
こんなにも美しかったとは……。二ワトリや  
ガチョウがあちこちで鳴いている。四号炉で  
も病院でも、「放射能」でいのちは隠れていた  
のに、ここではないのちが見える。今まで鞆か  
らカメラを出したり、仕舞つたりしていたの  
に、ここでは仕舞うときがない。撮影済みの  
フィルムがどんどん増えていく。このいのち  
がいつばいの風景を写すことができれば、そ  
こから「核」の正体も見えてくるのではない  
か。自分たちの村々がこんなに美しい所なん  
だと、この風景を撮って、あの入院中の子ど  
もたちに見せたい。この時、ぼくは初めてチ  
エルノブイリが撮れそうな気がした。

村人たちは、カメラを向けると必ず話しか  
けてくれる。片言の言葉で「日本からだ」と  
伝わりと、農作業を休んで家に招かれる。あ  
つという間にテーブルに並ぶごちそう。全部  
自分のところで取れたものだと思つた。そし  
て必ず自家製ウオッカ、サマゴンが登場する。  
家での祭りごとだけに黙認されているはずの

密造酒だ。多くの訪問が家での祭りごとにな  
ったのだから、悪い気はしない。二日前まで  
は、もう二度と来ることがないと思つていた  
のに、いろいろな所で次々に約束ごとができ  
て、その三カ月後には再訪していた。

ぼくがなぜ、このチエルチエスクの村々に  
魅せられたのか。それは彼らの暮らしとその  
佇まいの居心地のよさだと思つた。数世紀前の、  
どこかヨーロッパの絵画を思い起こさせる風  
景。それは長い年月をかけて、彼らの暮らし  
の中で守られてきた佇まいなのだろう。舗装  
されていない村道を馬車が走つて行く。家の中  
に、電化製品はほとんど見当たらない。電  
灯だつて、各部屋に四〇ワットほどの白熱球  
があるだけだ。でも村人たちは舗装されてい  
なくても、自動車や電化製品を持っていない  
でも、自分たちはひとつも貧しいと思つてい  
ない。そこには、いつの間にかぼくたちが失  
ってしまった、モノの豊かさではない、本来  
の豊かさが生きているのだ。

ぼくはこの地に通いだして、三冊の絵本、  
三冊の写真集、二本の映画を作った。あんな  
に嫌だった「石棺」にも、病院にも、その後  
たびたび訪れた。その彼らの暮らしを伝える  
ことで、よりチエルノブイリの悲劇を想像し  
てもらいたいと思つている。

本来の豊かさのある所は、人を謙虚にさせ  
る。見えないものが見えてくる。そして、す

べてのいのちの話につながっていく。『ナージヤの村』のドウジチ村のクルチン夫妻は豚を上手に育てる。そして、可愛がって育てれば育てるほど、肉は美味しいと言う。チャイコスカヤおばあさんは、白い山羊ヤギを飼っていた。おばあさんは山羊の好きな草を与え、山羊からは毎朝コップ一杯のミルクをもらう。冬、その山羊が足の怪我がもとで死んでしまう。おばあさんはとても悲しがる。あれだけ仲良かったのだから、当然だと思っていたら、悲しかった本当の理由は、死んだ山羊を外に置いていたら犬に食べられて、自分が食べてあげられなかったことだったのだ。おばあさんにとって、可愛がったということは、肉まで食べてあげることなのだ。

おばあさんは春、家の前の白樺の若葉が芽吹いてくると、幹に耳をあてて、「さあ、どんどんお飲み」と話しかける。秋、真っ黄色になった葉が、ある朝突然、雨が降るように落ちはじめると、木の下のベンチに座って、両手を広げて「ごくろうさん、ごくろうさん」と声をかける。

『アレクセイと泉』のブジシチュ村のニーナおばあさんは、「町にアパートを用意したのだから、早く引越しなさい」と役人からたびたび勧告されるが、そのたびに、「放射能が体に悪いというのなら、この家で一緒に暮らしている牛や馬や豚、ニワトリやガチョウ、

犬や猫も連れて行かなくてはいけないね」と答える。そう、チェルノブイリの事故の被害者は人間ばかりではないのだ。

年寄りたちがこの村から引越したくないもうひとつの理由は、いのちをお返しするときに、この泉に水をお返しできないから嫌だという。たしかに、人の体の七割は水。六十キロの人なら四十二リットルも持っていることになる。この地球上に絶対量しかない淡水を、動物も植物も分け合って借りているのだ。いのちというのは水を借りているということ。そして、いつかはそれをお返しするものだという事など、ペットボトルの水が満ち溢れているぼくたちの暮らしの中では、とつくに忘れていたことだった。

村の中で唯一の若者であるアレクセイは、映画の中で、「働くことは食べる」と言っている。彼らにとつて働くことはモノを買うためではない。高いインフレ率のこの国で、預金をしている村人は誰もいない。年寄りたちは年金をもらってもすぐに日用品を買い、町に出て行った息子や娘たちに送金してしまう。誰もお金を信じていないのだ。だから、バブルがはじけても、インフレが続いてもひとつも恐くない。それができるのも、「働くことは食べる」とし、食料はちゃんと自分たちで作っているからなのだ。自給率三割台の日本が、この村から見るととても貧しく思

えてくる。

それにしても、皮肉なことだと思う。ほとんど電気の恩恵を受けていない彼らが、原発事故の被害者になった。彼らの何倍もの電気を消費しているぼくたちの町に、原発事故の放射能が舞い降りても、誰も文句は言えまい。

汚染されたパーブジェ村で、移住を拒否し住み続けていた、当時八十三歳のアルカジー・ナボーキンさんの「どこへ行けというのだ。人間が汚した土地だろう」という言葉が、いつもぼくの頭の中をまわっている。これはぼくが発した、「どうしてこの汚染地から移住しないのか」への答えなのだが、まるで他人ごとのようなその問いに対する強烈なひとことだった。そしていつの間にか、「地球にやさしく」など傲慢なことを平気で言っているぼくが恥ずかしくなった。あえて汚染地に住み続け、自分が生きていることを自らの肉体の存在をもって証明している一人の老人。それは大地が汚染されたことへの無言の抗議であり、その場に居合わせたぼくに対するメッセージでもあったのだ。

あの、モスクワからの列車の十三時間の旅は、まさにモノの豊かさからもうひとつの本来的豊かさへの、ぼくの中の価値観を変える大切なタイムトンネルのような気がする。

(もとはし せいいち・写真家)

写真集に「炭鉱(ヤマ)」現代書館